

# 秀歌三十首十今年の収穫

倉石理恵

実家とう言葉が徐々に馴染まずになりおり父も母もおらねば  
一月号・田中 拓也

ひと日だけ福島に来て福島に寄り添ふと云ふひとのをるなり  
本田 一弘

柄の割れた九谷焼の急須よみがへる月夜のZ o o m金継ぎ教室  
桐谷 文字

水鳥の千や二千を腹に乗せ今朝の多摩川機嫌のよろし  
二月号・藤島 秀憲

顔半分をマスクで隠す日常は意外と染で癖になりたり  
加利川友子

雨が降るだけの動画を繰り返し見てをり、パリの街に雨ふる  
野原亜莉子

外套に冷気を溜めて帰宅せし夫が告げくるる月の明るさ  
三月号・河野 千絵

いつまでも回り続けるハムスターの親と子どもとその子どもたち  
佐佐木定綱

わが宛名を印刷されし葉書五枚文箱にのこし母は逝きにき  
幸野 一枝

円空仏に残る鈍目の一振りのふかぶかと空に夕焼けが来る  
四月号・奥田 亡羊

感染者出たんですよね保護者からかかる尋問のような電話は  
齋賀 万智

二駅を眠りてしまい前に座す姥が男に変わりに居りぬ  
近森起久子

月光を通さぬマスク息苦しマスクはづして光を吸ひぬ  
五月号・伊藤 一彦

わずかなる六人の客乗せて飛ぶコロナ禍の中的那覇行きの便  
池袋 貞子

突然の別れのように苦しうて辛いこんなにつつま先  
門田 祥子

壊された橋をそれでも渡りくる家族だろいう遠く画面を過ぎる  
六月号・佐佐木幸綱

午前四時いつものやうに水充たし薬缶火にかく戦地にとほく  
田中 薫

マイホームに人命救助の重機入り了解もなく更地となれり  
小川けい子

軒先にかろくはづめるあめの音を春のとほれる音と聴きをり  
七月号・横山未来子

竹山広を読んだ人と読んでいない人 会えたと会えなかつた人  
久松 洋一

細き脚をほそき流れに浸しつつ立ちをり夜の白川の橋  
梅原ひろみ

「黙浴」の張り紙はもう剥がされて老若女がさがざめく湯船  
福崎 享子

きみがぬない日々に私はワクチンを三回打つた効くと信じて  
山本枝里子

心にも眉間のあらん檜の実のひとりの夜に皺深くなる  
八月号・森屋めぐみ